

昔話

山谷えり子



幼い頃、海幸彦と山幸彦の神話が大好きだった。そのせいかどうか、中高時代は水泳部、大学時代は登山部で、海と山に抱かれながら過ごした。

当時は日焼けなど気にもしない時代で、夏には黒光りする身体に太陽を浴びて太陽讃歌の時を過ごしたものである。もっとも「讃歌」とは、すなはち「祈る」ことと同義語であると感じ入るやうになったのは、割合最近になってからのことである。

中学時代に父の仕事上の挫折から借金をかかへて故郷の福井から東京に引っ越した私は、人口八十万人の東京都世田谷区水泳大会でいきなり準優勝をし、銀メダルをいただいた。思えばこれが私のオリンピック選手を夢みる第一歩となったのである。公立中学校に通ふ私には、特別なコーチはゐない。ひたすら雑誌に掲載されたオリンピック選手のトレーニングをまねて練習を重ねた。一日二万メートル走るか、泳ぐかをしなから、陽の光と風のそよぎの中に身を置く幸福を無上のものとし、同時に、借金のある家計への配慮から、将来は水泳を職業として生計を立てられないだらうかなども考へてゐた。

以前にも触れたが、ある夏の日、オリンピック選手だった木原美知子さんと泳ぐ機会を得た。そこでどんなに努力しても、レヴェル

に達しないことを思ひ知らされたのである。父に失意を話すと、「一番人気のない種目は何だ?」と問ひ返してきた。自由形と平泳ぎの選手だった私が「長距離、バタフライ」と答へると、父は「じゃ、それに変更したら」とアドヴァイスしてきたのである。その年の夏、私はバタフライの練習に猛然と取り組み、東京都の水泳大会で六位入賞を果たした。

帰宅し、試合報告をすると、父はニヤリとして「若い時は勝ち負けにこだはり、「勝つ」ことが大事。勝つといふ経験は人を率直に明朗にする……といつてもさうは勝てない。その時は「六狙ひ」。戦略的に勝つ方法を探せ。いい勉強になったなあ」と言ったのであった。この夏、家族と山登りをしながらそんな若き日の思ひ出に浸っていると、ふいに父の声がしたやうな気がした。「孫に金太郎、桃太郎、ウサギとカメや日本の昔話を与へてゐるかい?」

このところ三歳の孫は図書館や幼稚園から頻繁に絵本を抱へてきて「ばあちゃん読んで」とせがんでくる。しかし、新作絵本ばかりで古典的昔話はその中にほとんどないのである。

新しい絵本も良いが、まづ古典的昔話と与へる中で幼児は身体の奥深くに日本人の心をとりに込んでいくやうな気がする。日本人らしい勝ち方、負け方、勝っておごらずの有りやうも同時に美意識として刻んでいくのではないだらうか。

「得意淡然、失意泰然」。夏は、勝つこと、負けること、笑ふこと、悔しがること、そして、父祖に抱かれるにふさはしい季節である。

(参議院議員、神道政治連盟国会議員懇談会副幹事長)

杜に想ふ